

Clinical Art and Encounter Art

クリニカルアートとエンカウンターアート

Tohoku Fukushi University, Associate Prof.

Japan Clinical Art Association, Director

The Society for Clinical Art, Director

東北福祉大学 准教授

日本臨床美術協会 理事

臨床美術学会 理事

Taizo Oshiro 大城泰造

Today's Topic

本日のトピック

① The role that Clinical Art plays in well-being

臨床美術がWell-beingに果たす役割について = 臨床美術とは？

② About the effects of Clinical Art

臨床美術の効果について = 効果測定とその結果

③ Clinical Art and Encounter Art

臨床美術とエンカウンターアートの関係 = EA発展初期について

① The role that Clinical Art plays in well-being
臨床美術がwell-beingに果たす役割について

- Regarding the involvement of Clinical Art in the well-being of Elderly people

高齢者のWell-beingへの関わりについて

- How Clinical Art relates to the well-being of people working in companies

企業で働く人のWell-beingへの関わりについて



□ 二人で描いたアナログ画



□ さつまいもの量感画

まずはじめに臨床美術(Clinical Art)とは何か、についてその概要を皆さんにご紹介いたします。



□ アジの干物をラギング技法で描く



□ 石に描くアナログ画

臨床美術とは、1996年から認知症の予防や認知症の進行抑制を目的として、
日本において彫刻家の金子健二を中心にチームを組んで開発されたアートセラピーのひとつです。

三位一体のチーム

医師

患者さんご家族

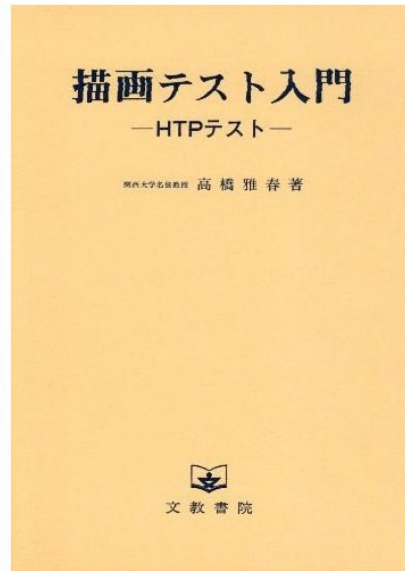
ファミリーケア
アドバイザー

臨床美術士

世界でも類のない、医療と、芸術と、福祉の壁を越えた、
認知症の患者さんとそのご家族を中心にしたモデルとして高い評価を受けています。

□ HTPテスト(House-Tree-Person Test)

Buck,J.N が開発した、家と樹木と人を描いてもらうことによってパーソナリティを査定する描画法の検査



あなたなら、
どんな樹や家を描く??



©kokoro-integrate.com

皆さんの中に、芸術療法(Art Therapy)という言葉聞いた方は多いと思います。

アートセラピーにはいくつかの種類がありますが、心理療法としてのアートセラピーの印象が強いです。

これは正確にはアートサイコセラピーと呼ばれるもので、描かれた絵を分析して、

その人の持つ心理的問題を読み取ることに利用し、クライアントへの洞察力を深めることを助けるものです。

ですから心理主体のアプローチです。



これに対して臨床美術(Clinical Art)は、その人の表現活動自体を重視しています。絵画の分析はしません。

表現そのものを楽しむ臨床美術は、よりアート主体のアプローチだということもできます。

どちらのアプローチが優れているということではなく、どちらのアプローチにも意義があると思います。

臨床美術は、参加者が美術を創作することによって自らを変えていくこと、
そしてその作品が褒められることによって自らが変わっていくことを大事にしているのです。



- 具象・抽象、平面・立体の
様々なアートプログラム



臨床美術は、絵画や立体制作などの質の高いオリジナルなアートプログラムが準備されていて、
専門の教育を受けた臨床美術士によって実践されています。



現在では、高齢者だけでなく、保育所・保育園や小学校で、「子どもの感性教育」に活かされています。



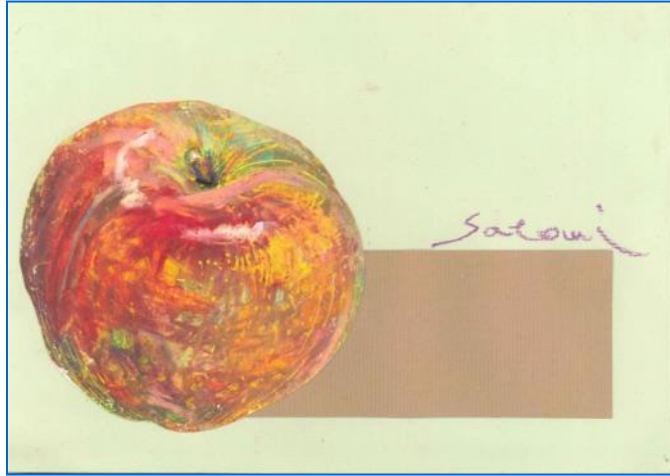
©www.zoukei.co.jp

また、大切な従業員のために美術で心の健康づくりを推進する
社会人のメンタルヘルスケアにも活かされています。

ここで企業で働く人のwell-beingについての取り組みを紹介する
DVDを皆様にご覧いただきたいと思います。時間は7分くらいです。



東日本大震災の際には、被災者の方々に仮設住宅で臨床美術を楽しんでいただきました。
被災者のメンタルヘルスケアにも活かされています。



美術を使っていいましたが、単に絵を描けばいいというわけではありません。

多くの方にとって、とりわけ高齢者にとって絵を描くことは“苦手だ”、

“鑑賞するのは好きだけど描くのは好きじゃない”という方が多いのです。

そういった美術に対する苦手意識をスツと取り払ってもらうために、臨床美術では様々な工夫がなされています。

臨床美術の基本的な流れ

出迎え 受容されていることの確認

挨拶 名前を呼び握手

導入 リラックスした雰囲気でのコミュニケーション
五感ストレッチング、
リアリティーオリエンテーション
バリデーション、回想法、唄、体操など
参加者の一体感、参加者の自主性を促す

臨床美術の基本的な流れ

□ 脳活性化アートプログラム

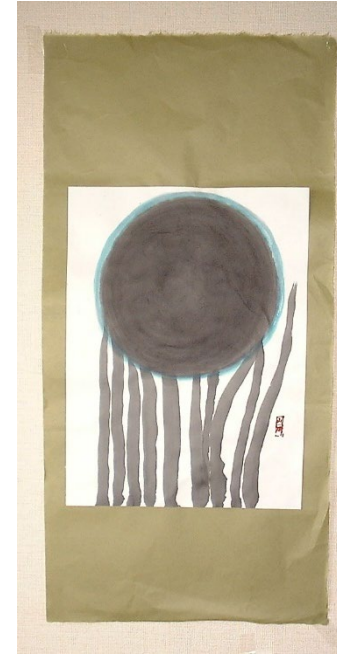
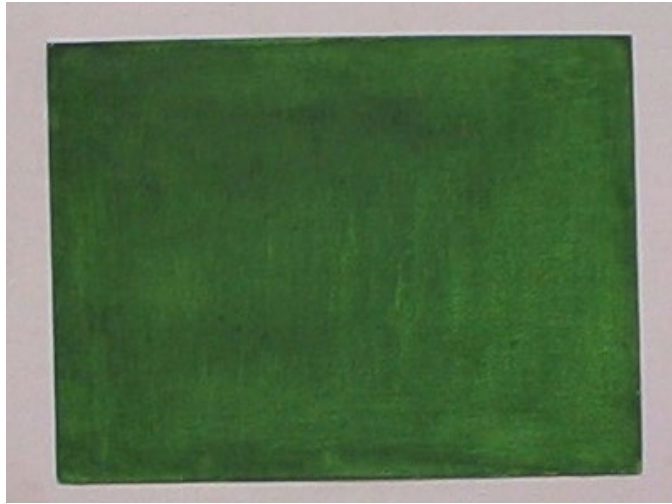
- ・五感刺激・決断力、選択力を高める
- ・非日常空間の提供
- ・既成概念を取り払い発想の転換（再発見）を喚起する

- ## □ 鑑賞
- 講評ではなく鑑賞
すばらしいところをみなに話す
自分の感想を話す
他人の作品に拍手する

- ## □ 挨拶
- 握手して送り出す一回への意欲づくり

どんな絵でも褒める

「思い出の空を描く」



「菖蒲の花を描く」

作：重度認知症の男性

理解障害と固執あり

正直な人に次のように聞かれることがあります。

「どんな絵でも褒めるんですか？そんな綺麗ごとはいいです。先生、絵を勉強されてきたんでしょ？」

先生の中からみて“これはどうしようもないな、つまらない絵だな”と思うこともあるでしょ？嘘をつくんですか？」

と詰められるときがあります。「どんな絵でも褒めます」と答えます。

「どんな絵にも必ず良い所があります。どんな絵にも必ずハッとするとところがあります。

それを見つけられず、本気で相手に伝わるように伝えられないのは、

こちらの感性の問題だと思っています」と答えます。本当にそう思っているからです。

Clinical Art's view of humanity

臨床美術の人間観

何ができるかではなく、その人の存在そのものを喜ぶ。

そこにいてくれることを感謝する。

それが臨床美術の人間観です。

そして、この人間観は、どのようなサービスであれ

超高齢社会の自然な一部として役立たせるうえで

不可欠なものだと思っています。

② 臨床美術の効果について＝効果測定とその結果

- 脳だけを見ているのが臨床美術ではない
- 人間の尊厳を包括的に受容する活動であること
- 本人とその家族も変化していくこと

臨床美術の視点

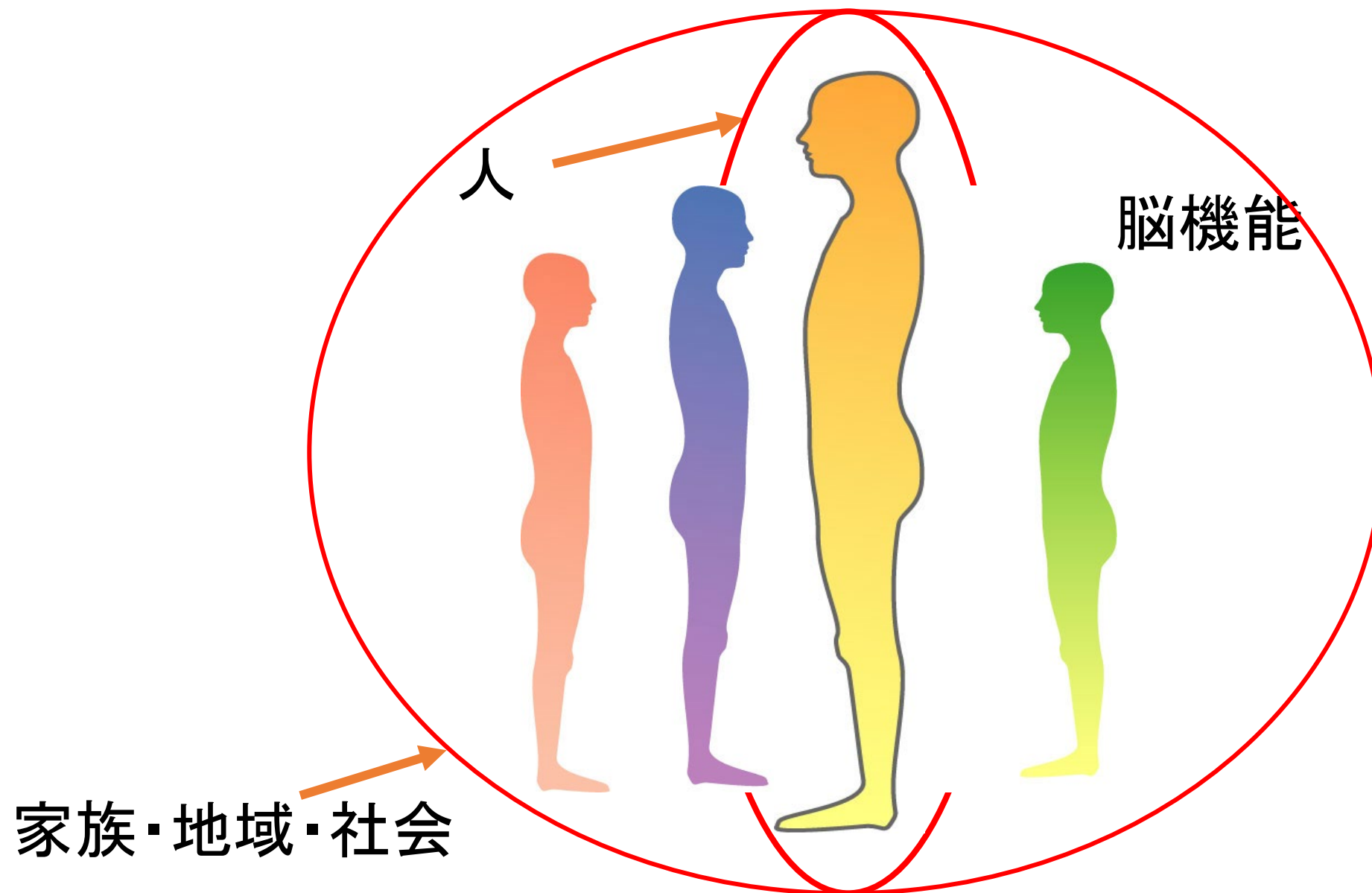


図1. 脳波測定

脳波は治療開始前3分間、終了後3分間測定される。
CAは電極を装着した状態で行われる。

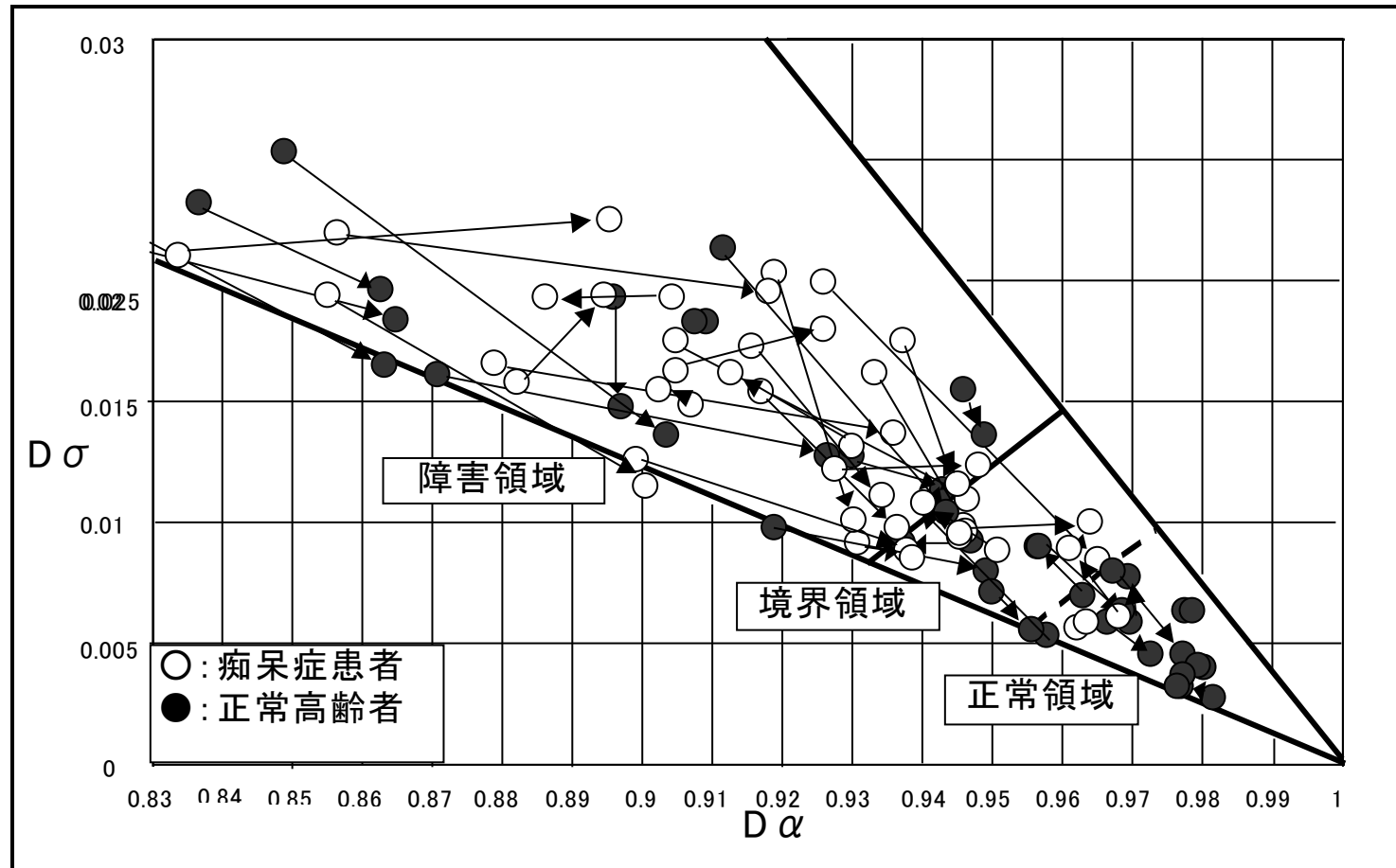


図2. 全症例の治療前後の $D\alpha$ 変化

$D\alpha$ はこの診断図を用いて正常領域、境界領域、障害領域と評価されている。

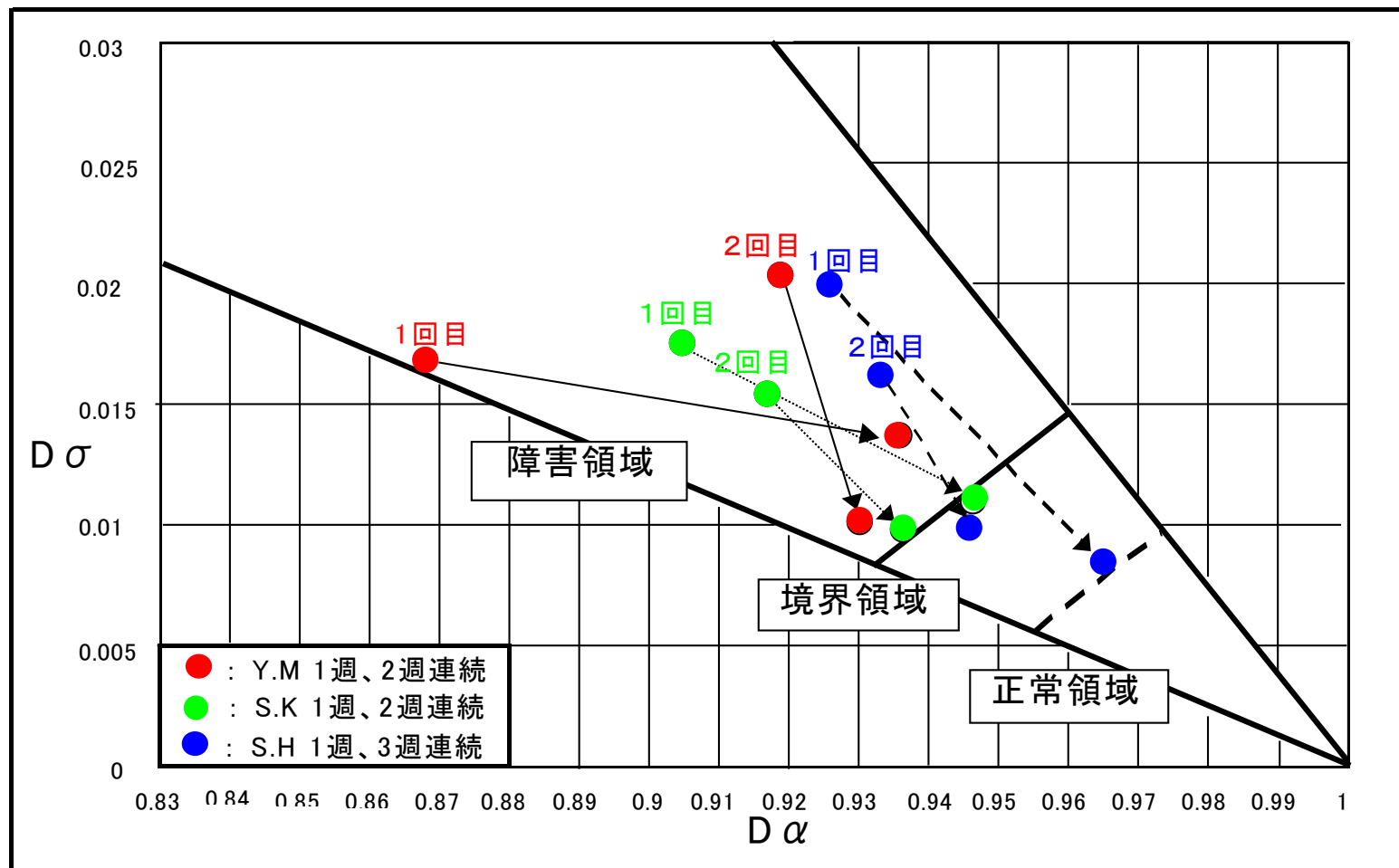


図3. 2回連続で検査した3症例の $D\alpha$ 変化

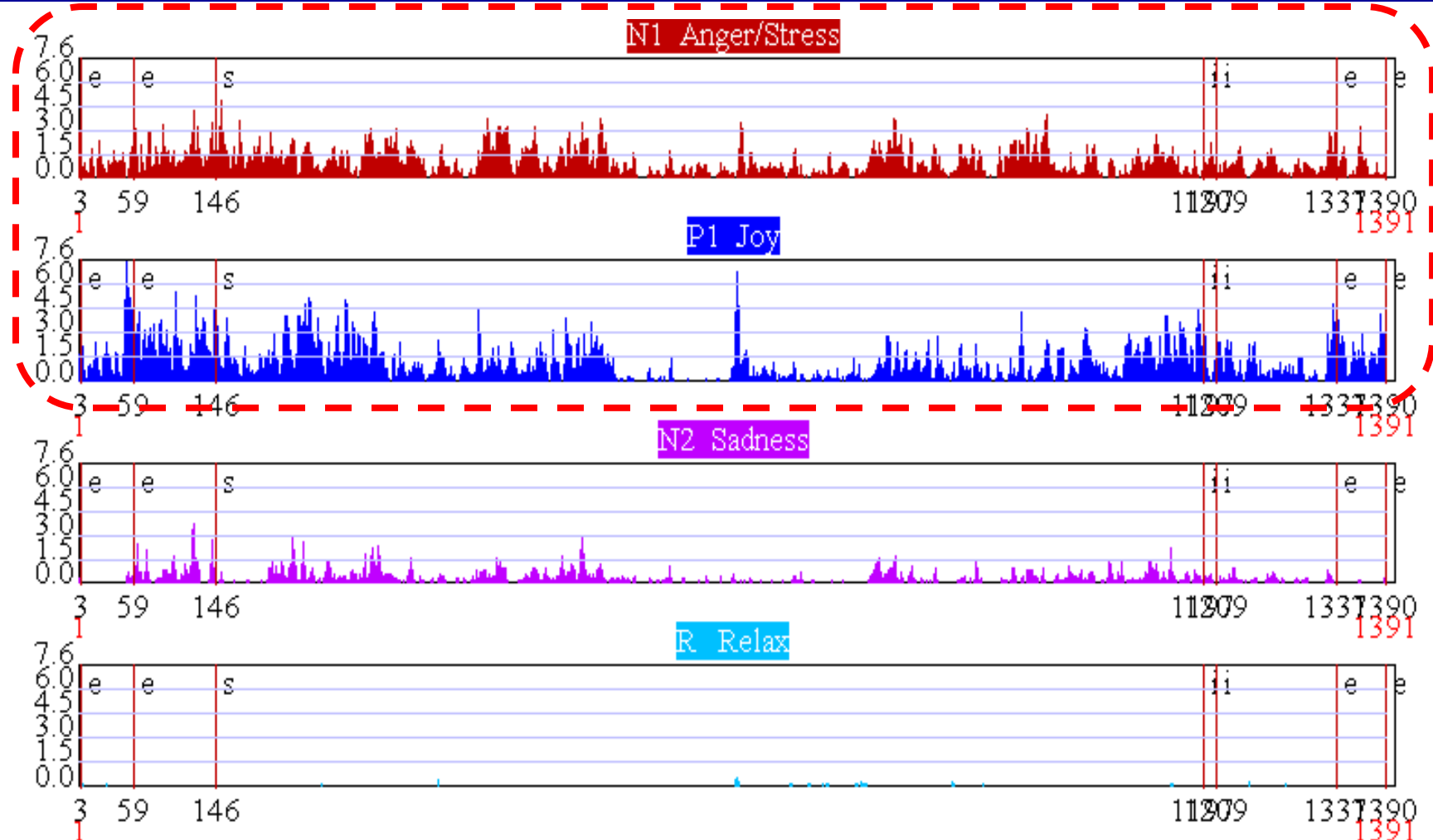
全症例で、2回目の治療前 $D\alpha$ は1回目の治療後 $D\alpha$ に比較し悪化している。
しかし、2回目の治療後 $D\alpha$ は再び改善している。

② 臨床美術の効果について＝効果測定とその結果

- 脳機能の変化(神経細胞の活動性)には可逆性があるということ
- 継続的に行わなければ効果がないこと
- 継続するには楽しくなければ、
意欲が湧いてくる内容でなくては長続きしない。

楽しいストレスのすすめ

感性スペクトルによる感情解析



N1,P1グループ

② 臨床美術の効果について＝効果測定とその結果

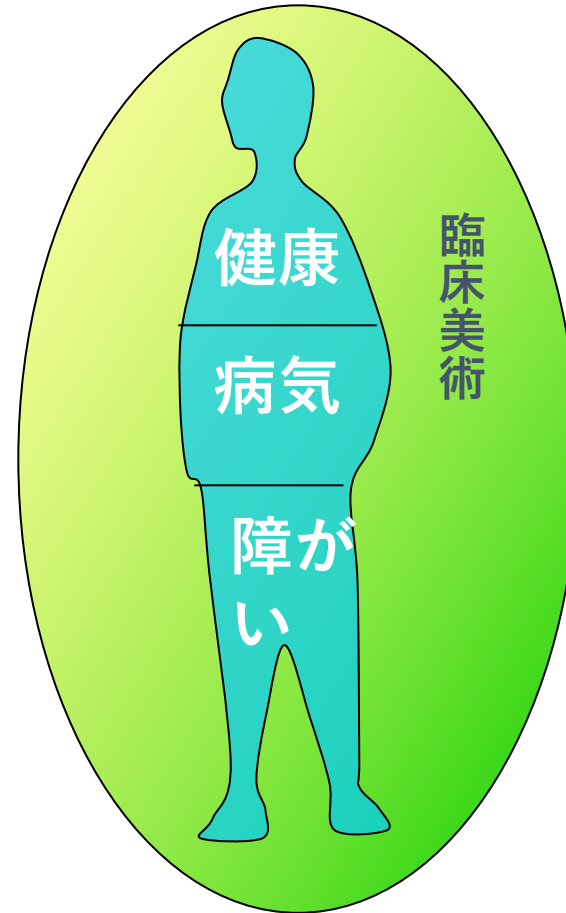
- 喜びとリラックスが多ければ効果があると予測していたが、
実際には喜びとストレスがある人が最も効果があった。
- 創作しているときは様々な迷いと決断の連続である。
色選びに迷い、構図に迷い、そして選択し、決断している。
それはストレスだが、適度なストレス、楽しいストレスといえる。

臨床美術の意義と効果

臨床美術の人間観に則った
包括的プログラム

- 主体的に認知過程を活性化する
(知覚・注意・記憶・判断・言語)
- 強い刺激（ストレス）ではなく、楽しい刺激
- 自らが喜びを持って継続的に取り組める
- 自分で自らを変化させていく
- 意欲、社会性、生活の質 (Quality of Life) の向上

人間の尊厳を包括的に受容するプログラム



アートは年齢、健康、病気、障がいの壁を越える

自分で自らを変化させるとは？

病気にかかると医者に行きます。医者が手術をしてくれたり、薬剤師が薬を処方してくれます。治療は任せるしかありませんし、薬は効くのを待つしかありません。当然のことながら受動的で、痛みや苦しみを他者にとってもらうのです。

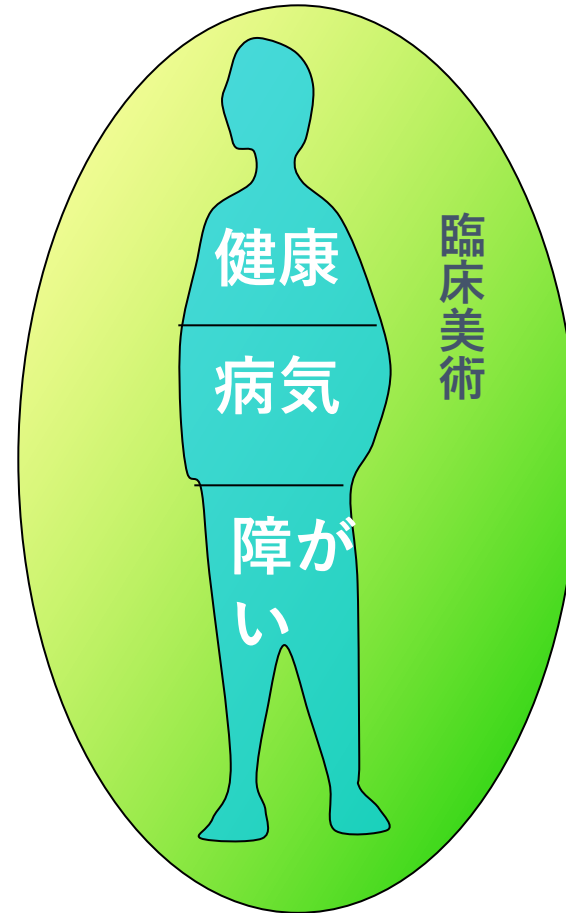
臨床美術は自分自身で絵を描きます。他者とのコミュニケーションを自分がとります。自分で自分を治したり、新たな発見をしたり、自己効力感を高めたり、という要素が入ったとても能動的な活動です。そのようにして自己生成していくのです。自分で自分を作り変えていくのです。

臨床美術の意義と効果

臨床美術の人間観に則った
包括的プログラム

- 主体的に認知過程を活性化する
(知覚・注意・記憶・判断・言語)
- 強い刺激（ストレス）ではなく、楽しい刺激
- 自らが喜びを持って継続的に取り組める
- 自分で自らを変化させていく
- 意欲、社会性、生活の質 (Quality of Life) の向上

人間の尊厳を包括的に受容するプログラム



アートは年齢、健康、病気、障がいの壁を越える

② 効果測定とその結果への批判

- MMSEはスクリーニングテストである。
スクリーニングテストの結果で効果があったと言って良いのか？
- 脳波で何がわかる。
脳の働きは複雑で、脳の奥深いところで活動している。
それなのに頭皮上の電気活動を測って何がわかるのか？

そのとおりです。

でも科学的な知見とは、今ある定規を使って、この定規で測ったらこうですと、誠実に積み上げていくことが大事だと思います。

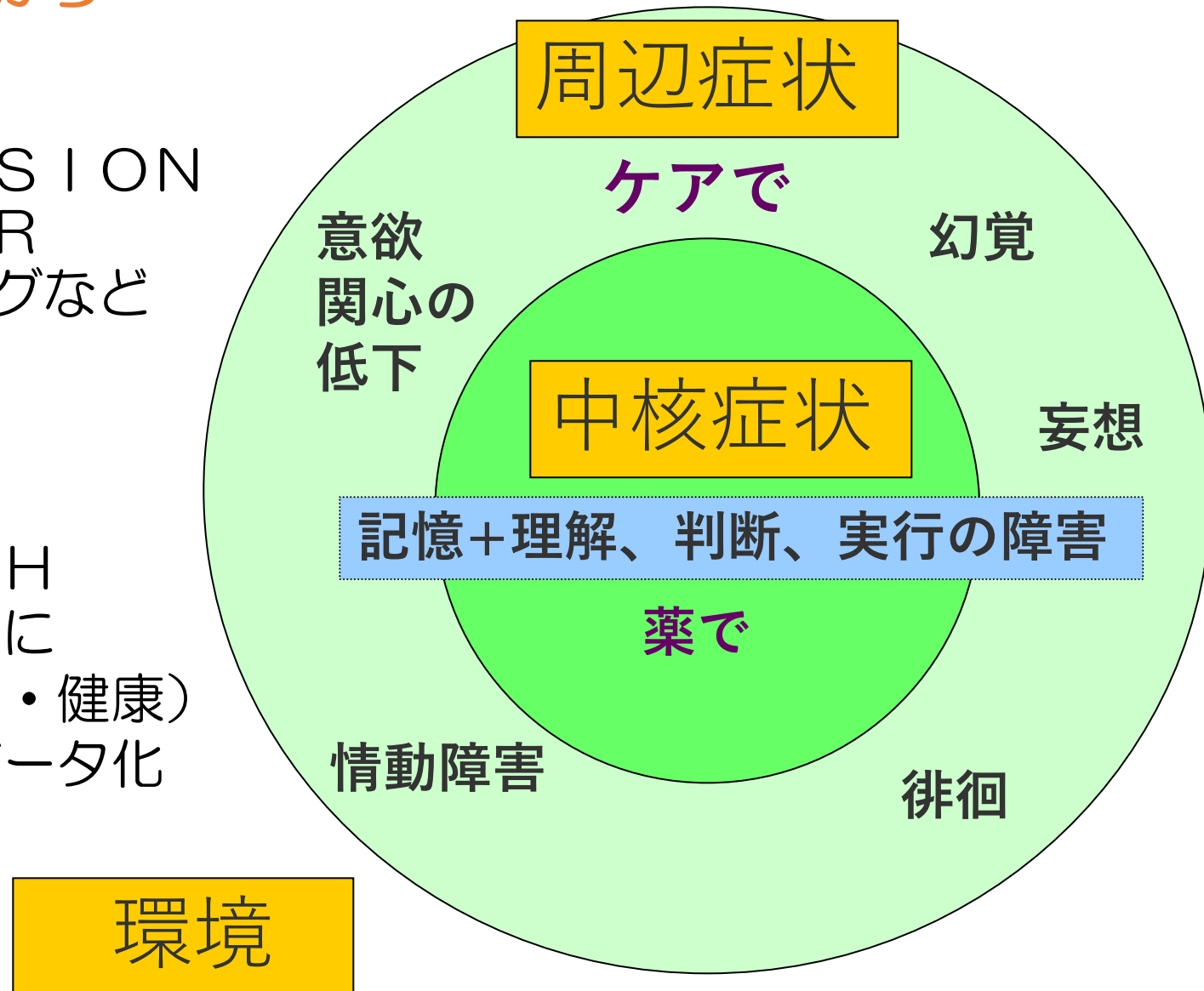
効果をどう測るのかーエビデンス手法の確立

脳科学の見地から

- MMSE
- DIMENSION
- WAIS-R
- ファイブコグなど



EBM・EBH
(科学的根拠に
基づいた医療・健康)
＝数値化・データ化



効果をどう測るのかーエビデンス手法の確立

- 社会福祉分野の研究では、自然科学とは異なり、介入実践する際のアセスメントの視点と枠組み、問題解決のためのプログラムの妥当性の検証などプログラムの評価研究法が重要となる。
- 有効性測定をいかにするか？
行動変容をもたらした要因は何なのかを
きちんと標準化するには？
そして、そこで起こる行動変容をどのように表現していくか？



ナラティブ・ベースドという考え方

ナラティブ・ベースド (Narrative-Based) によるアプローチとは？

「数値的根拠よりもクライアントの個別性を大切にしていくこと。
年齢・環境・性別・身体・心など、あたかも指紋のようにひとりひとり
異なり、愁訴もそれぞれのものであり、同じ人でもその日によって
メンタルに違いがあるものです。
悲しさにもそれぞれの色があるのです。」

「クライアントが環境世界との相互作用において連続的に生じる物語。
空間と時間の中で、要素と要素がつながりながら作り上げる物語。
物語は多様であり、偶然であり、一回限りであり、数値化には親しまない。
物語はその人だけの世界である。
そこに主体があり、存在の確かさがある。」

臨床美術における動的平衡

自分で自分を作り変えていくこと。

一見変化していないように見えるけれども、
内的にはすごく変化しています。

MMSEの点数には変化はおこっていないけれども、
確かに落ち着いてきた、表情が豊かになった、夜寝られるようになった。
これはとても動的な変化を伴った効果、落ち着きだと言えます。
臨床美術の目的は、認知症の改善にあるかもしれないけれども、
大事なことは何も知能テストの点数は変わっていないけれど
確かに生活が良くなったという本人やご家族の実感だと思います。

② 臨床美術の効果について

たとえ知能テストの点数は変わっていないけれども
確かに生活が良くなったという実感は、
別の言葉でいうとナラティブ（物語り）です。
一人一人の確かな変化の実感はナラティブです。

臨床美術は、
EB（エビデンス ベースド）とNB（ナラティブ ベースド）の
その両方が重要だと思っています。

臨床美術の未来

人間の脳にもものすごいスピードで近づいてきたのがAIです。

AIが人間を超えるシンギュラリティー（特異点）は2024年と言われています。

頭で考えるホワイトカラーの専門職がなくなりエッセンシャルワーカーが残るとも言われ、

AIが描いた絵と区別ができないからアートは残らないとまで言われています。

でも実際には、AIの技術を活かして新たな芸術を生み出す機運が高まっています。

「情報の消費活動の主体がコミュニケーションにあるならば、

我々は静的パッケージから動的インタラクションに移行するだろう」（落合陽一）

臨床美術はまさに動的相互作用であると言えます。

臨床美術の未来

認知症の特効薬ができたとします。レカネマブも期待されています。

認知症の治療目的のみに臨床美術の役割があるのならば
臨床美術はいらなくなるでしょう。

しかし認知症が治る病になっても、臨床美術は継続していく、
必要とされると思っています。

Today's Topic

本日のトピック

① The role that Clinical Art plays in well-being

臨床美術がWell-beingに果たす役割について = 臨床美術とは？

② About the effects of Clinical Art

臨床美術の効果について = 効果測定とその結果

③ Clinical Art and Encounter Art

臨床美術とエンカウンターアートの関係 = EA発展初期について

共同企画 Co-hosted by:

東北福祉大学 Tohoku Fukushi University
ラウレア応用科学大学 Laurea University of Applied Sciences,
ヘルシンキスクール・オブ・エコノミクス Helsinki School of Economics

主催 Promoter:

東北福祉大学・東北福祉大学感性福祉研究所 「文部科学省学術フロンティア推進事業」
Tohoku Fukushi University(TFU)・Kansei Fukushi Research Center, TFU

後援 Thanks to the Sponsors:

仙台市 Sendai City
仙台市産業振興事業団 Sendai City Industrial Promotion Organization
社団法人シルバーサービス振興会 Elderly Service Providers Association
日本介護経営学会 Japanese Association of Business Management for Long Term Care
フィンランド大使館商務部 FINPRO
フィンランドセンター The Finnish Institute in Japan
フィンランド技術庁 The Finnish Funding Agency for Technology and Innovation (Tekes)



第1回 仙台フィンランド学術会議

The First Sendai-Finland Seminar

高齢者ケア・介護事業経営の革新

Refurbishing the Elderly Care -Theoretical Task and Managerial Strategy-

お問い合わせ [Inquiry]

SFN実行委員会事務局
(国際交流センター内)

仙台市青葉区国見ヶ丘6-149-1
TEL:022-727-2348 FAX:022-728-6420



この度、東北福祉大学では、

フィンランドのLaurea University of Applied Sciences、

Helsinki School of Economic 他との協定のもと、

「高齢者ケアと介護事業経営の革新」にむけての新たな取り組みを行うこととなりました

その第一歩として、来る2006年3月6日・7日8日に

「第1回仙台フィンランド学術会議 The First Sendai-Finland Seminar (2006SFS)」を
開催する運びとなりました。

東北福祉大学「けやきホール」 仙台市青葉区国見1-8-1

公開シンポジウム

2006年3月8日(水)

Symposium (open to public) March 8, 2006

ワークショップ

2006年3月6日(月)・7日(火)

Workshop, March 6・7, 2006

スタディ・ツアー

2006年3月9日(木)

Study Tour, March 9, 2006

ワークショップ Workshop

6th March Monday
At the Main Conference Room, Main Campus

Session 1 10:30-12:10 Concept of The Care-Finding Research Issues

Chairperson:
Professor Helena ERJANTI,
Laurea University of Applied Sciences

Changing Care-Theory and Practice-
Professor Dr. Koichi OGASAWARA
Tohoku Fukushi University

Concept of the Well-being
Dr. Katarina RAIJ
Director of Department of Professional Higher Education,
Laurea University of Applied Sciences

Session 2 13:20-17:40 Social Services and Care Provision System

Chairperson:
Professor Koichi OGASAWARA, TFU

Integrated Care in Practice
Mr. Ossi SAVOLAINEN
Deputy Mayor, City of Vantaa

Reforming Home Care Provision: The Best Practice
Ms. Anna-Liisa KORHONEN
Director of Services for Elderly and Disabled City of Vantaa,
Tikkurila Health and Social Welfare Center

Age-related Characteristics in Sleep and Biological Rhythms of the Elderly
Dr. Koh MIZUNO
Lecturer, Kansei Fukushi Research Center, TFU

Oral Health Care for the Elderly
Dr. Yoshihiko WATANABE
Lecturer, Kansei Fukushi Research Center, TFU

Clinical Art for the Elderly
Mr. Taizo OSHIRO
Lecturer, Kansei Fukushi Research Center, TFU

7th March Tuesday
At the Main Meeting Room,
Kansei Fukushi Research Center

Session 3 9:00-12:20 Information and GroupWear Technology in Health and Welfare Care System

Chairperson:
Professor Helena ERJANTI,
Laurea University of Applied Sciences

Case Presentation: Mawell
Mr. Tero SILVOLA
CEO, Mawell Ltd

Case of TDC Song Ltd.

Case of HUR

Case Presentation: NTT
Mr. Susumu FUJIWARA Director General, NTT

Session 4 13:30-17:00 Care Business Management and Networking

Chairperson:
Koichi OGASAWARA, TFU

IT for the More Effective-Efficient Care Provision System
Dr. Hannu PIRNES
Principal Lecturer,

Networking Service Provisions
Dr. Nozomu SHIMAZU
Associate Professor, Sophia University

Coping at Home
Dr. Katarina RAIJ
Director of Department of Professional Higher Education,
Laurea University of Applied Sciences

Value Networks - Their Types and Challenges
Mr. Timo J. RIVENSIVU
Researcher, Helsinki School of Economic

Closing Session

Chairperson:
Professor Helena ERJANTI,
Laurea University of Applied Sciences

Concluding Remarks
Mr. Jaakko TARKKANEN
Regional Principal, Laurea University of Applied Sciences

公開シンポジウム Symposium (open to the public)

3月8日(水) [8th March Wednesday]
東北福祉大学 けやきホール [At the Keyaki Hall, Main Campus]

基調講演 [Keynote Presentation] 13:40-14:40

丹羽 雄哉氏 (衆議院議員/元厚生大臣)
Prof. Yuya NIWA, MP Former Minister of the Welfare and Health,
House of Representatives member

シンポジウム [Symposium] 14:50-17:10

シンポジスト [Guest Speakers and Discussants] (予定)

山崎 史郎氏 (厚生労働省 老健局総務課 課長)
Mr. Shiro YAMAZAKI, Director, General Affairs Section, MLHW

栃本 一三朗氏 (上智大学 総合人間科学部 教授)
Prof. Ichisaburo TOCHIMOTO, Sophia University, Vice Director, SMLTC

小山 剛氏 (高齢者総合ケアセンター こぶし園 園長)
Mr. Takeshi KOYAMA, Director, Kobushi Generic Care Networks

司会 [Coordinator]

小笠原 浩一 (東北福祉大学 教授)
Prof. Koichi OGASAWARA, TFU

招待発言 [Remarking Speech] 17:10-17:25

ヘレナ・エルヤンティ博士 (ラウレア応用科学大学 学部長)
Prof. Dr. Helena Erjanti, Laurea University of Applied Sciences

スタディーツアー Study Tour

3月9日(木) [9th March Thursday]
東北福祉大学 関連施設 [At the TFU Related Facilities]

なぜ臨床美術がフィンランドの人の心に響いたのか

「医療や住環境の整備はやってきた。
これからは人生の深いところの幸せ、サービスを考える時だと思っていた。

老いをネガティブなものからポジティブに捉え直し、
ケアサービスも受動的（パッシブ）なものから
能動的（アクティブ）に行われていくべきだと考えていた。

フィンランドには既に心理療法としてのアートセラピーは存在しており
歴史もあったが高齢者をアクティブにするということを目的に、
それ以外の方法を探していた」

（ハンネレ・ニーニオ）

ENCOUNTER ART AT LAUREA UAS years 2006 – 2012 (former Active Art)



ハンネレ・
ニーニオ先生（右）
と
アンナ・カイサ・
ペラニティ先生（左）





日本留学中に臨床美術を学び
自作のアートプログラムを実施するアンナ先生





フィンランド人の謙虚さ

福祉先進国として

教育先進国として

日本からの使節団を
多く受け入れていた立場



臨床美術とエンカウンターアートの協働は
17年間に及んでいます。

Ms. Virpi Lund and Ms. Johanna Holmikari came to
JCAA in April, 2018



Tiina Pusa (ed.)

ENCOUNTER ART

Handbook for a Group Guide



Interdisciplinary Studies Journal

Contents

Tervehdykset Greetings	9
Artikkelit Articles	15
Työpajat Tiistai 8.5. Workshops Tuesday 8th May	104
Työpajat Keskiviikko 9.5. Workshops Wednesday 9th May	116
Näyttelyluettelo Exhibition catalogue	125
Kirjoittajien ja työpajaohjaajien esittelyt Contributor presentations:	167

Listed in the Ulrich's
Indexed and abstracted in the ProQuest



LAUREA Prime Mover
UNIVERSITY OF APPLIED SCIENCES

Contact:
isj@laurea.fi
www.laurea.fi/en/isj

Publisher:
Laurea University of Applied Sciences
Rabatie 22, FI-01300 Vantaa, Finland

Printed by:
Edita Prima Oy
ISSN 1799-2710

Interdisciplinary Studies Journal - Volume 2, Number 1, 2012 © Laurea University of Applied Sciences



Interdisciplinary Studies Journal

Volume 2, Number 1 | 2012
Special Issue on Encounter Art Promoting Wellbeing
Kohtaamistaiden hyvinvointia edistämässä





Kiitos

